

1. はじめに

森 (2001a: 98) は彩としての提喩と能力としての提喩を区別し、後者を「言葉のタクソノミーを上下させて、物事を示す(認識する)「提喩能力」と呼んでいる。しかし、山泉 (2005) が指摘するように、提喩は決して単一の現象ではなく、「提喩能力」も単一の能力ではないと考えられる。本発表の目的は、「提喩能力」の内実を明らかにすることにある。そのため、提喩を(1)を満たすものとして規定する。①は私(たち)が感じる意味のずれ、すなわち、あや性にかんする規定であり、②はあや全般から提喩を選び出すための規定である。また、①は現実のコミュニケーションにおいて①'に示される推論過程として実現するものと考えられる。

- (1) ①話し手が提示する言語表現に慣習的に結びついた意味₁と、聞き手が理解する意味₂との間にずれがあり、②意味₁と意味₂に上位/下位カテゴリー(類/種)・下位/上位カテゴリー(種/類)関係が認められる。
- (2) ①'あるカテゴリーないし対象を、話し手が、現に捉えているのとは別の捉え方を介して提示し、聞き手が、提示された捉え方を介して、現に捉えている仕方を理解する¹。

このように提喩を規定するのは、提喩研究においてしばしば挙げられる、「花見」で「桜を見ること」を表す例や「下駄箱」で「履物を入れる箱」を表す例を排除し、提喩能力の働きを捉えるためである。これらの例では、意味₁と意味₂は等しく(花という捉え方を介して桜を、下駄という捉え方を介して履物を捉えているわけではなく)、歴史的に見て、提喩に基づいて拡張が起こった可能性は排除されないものの、共時的な提喩能力の分析対象にはならない。以下では、山泉 (2005) が提喩(として分析されてきた対象)の下位区分と見なす、4つのタイプをそれぞれ検討する。

2. カテゴリー名を個体に適用する提喩 (cf. 山泉 2005)

本節では、類で種を表す提喩の内、カテゴリー名を個体に適用するものを扱う。(3)では話し手は、対象を「人間」として捉えつつ(意味₂)、「生物」という捉え方(意味₁)を介して「人間」という捉え方(意味₂)を伝達している(すなわち、聞き手は対象が、「生物」を介して提示された、「人間」であることを理解する)ために、本発表の提喩規定に当てはまる。

- (3) [人間として概念化できる対象を指して] 生物が動いている。

「人間」を指示する際に上位カテゴリーである「生物」を用いるのは、あるカテゴリーにおいて非典型

¹ 話し手と聞き手が別人である以上、それぞれの捉え方にずれが生じるのはある意味では当然のことと言える。提喩を厳密に定義するためには、話し手が現に行っている「捉え方」に、より近い捉え方と慣習的に対応する「言語表現」が容易に喚起されるなどの条件も必要であると思われる、これは「あや性」の根幹に関わる問題であるため、提喩を分析対象とする本発表の射程を超えるものである。

的なインスタンスであっても、より上位のカテゴリーには問題なく収まる（ことが多い）という知識に基づいていると考えられる²。たとえば、(4) の話し手は「ロナウド」が「人間」としては例外的に身体能力が高いことなどを踏まえ、「人間」であることは承知の上で「生命体」という上位カテゴリーによって指示を行い、聞き手も「生命体」によって指示された「ロナウド」が「人間」であることを理解するからこそあや性が生じるのである。

- (4) ロナウド・ルイス・ナザリオ・ダ・リマ。二十世紀最後の、そして二十一世紀最初のスーパー
スターになるであろう生命体のフルネームである。 (森 2001b: 14)

このことは、(5) が (3) とは異なりあや性を持たないことから確かめられる。(5) では「生物」という捉え方（意味₁）を介して提示される捉え方（意味₂）は存在せず、「生物」の用法はあくまで、その下位カテゴリーでは指示できない対象を指示するという通常表現のものである³。

- (5) [生物ではあるがその下位カテゴリーでは概念化できない対象を指して] 生物が動いている。

基本レベルカテゴリーに関して、森 (1998: 52) は (6) ~ (8) を挙げ、「本来基本レベルで表現するものをわざとぼかして表現するところに「言葉のあや」が発生するのである。ただし、基本レベルどうしでの松—木の間に入れ替えはル・ゲランの主張と一致し、通常表現になる。対して、木—赤松なら基本レベルを飛び越えていても通常表現になる」と述べている。本発表の立場では、これらが通常表現として解釈されるのは、そもそも「入れ替え」（意味₁と意味₂のずれ）が生じていない、すなわち提喩ではないからだということになる。(9) のように下位レベルカテゴリーによって対象を捉えることが期待される場面であれば、基本レベルカテゴリーで呼び替えることであや性が生じる。しかしこの場合には (3) や (4) とは異なり、非典型的な「赤松」を指示しているという解釈は起こりづらいだろう。

- (6) そこの木を見ろ。 (森 1998: 52)
(7) そこの松を見ろ。 (森 1998: 52)
(8) そこの赤松を見ろ。 (森 1998: 52)
(9) [赤松を探している状況で、赤松を指して] 松があった。／木があった。

佐藤 (1978: 194-205) は、(10) の詳細な分析を通じて、カテゴリー名を個体に適用する提喩を特徴づけている。「「白いもの」は、本来の意味としては白いものいっさいを、そして臨時の意味としては雪を意味する……（白さ×雪）という二重の効果を発揮する。」(佐藤 1978: 197) という記述からも分かる通り、(10) は本発表の規定でも提喩と見なされる例である。この場合にも、(9) と同様に、非典型的な「雪」を指示しているとは考えづらい。

² たとえば、犬を猫と見間違える（哺乳類）のに比べて、犬をトカゲ（生物）や電信柱（モノ）と見間違えることは少ない。具体物を出来事と間違えるなどの極端な錯誤はきわめて稀であると考えられる。

³ 生物でありながら生物の下位カテゴリーで概念化することができない対象に出会うことは珍しいために、特殊な表現であるという印象が生じるかもしれないが、あくまでも特殊な状況に対応する普通の表現であることに注意されたい。

- (10) その日一日時折思い出したように舞っていた白いものが、その頃から本調子になって間断なく濃い密度で空間を埋め始めた。(佐藤 1978: 194)

では、(3)・(4)と(9)・(10)は、異なる動機に基づいた提喩なのだろうか。この点に関して、佐藤(1978: 198)の「白いもの」という表現は、雪のもつさまざまな特性のなかで特に白さだけ集中的に照明をあてていることになる」という分析が参考になる。

この世界の対象は、それ自体が持つ性質に従って「ありのまま」に現れるわけではなく、私(たち)の信念や身体などの諸状態に現れが左右されるものである(野矢 2016, 田中 2018)。(9)・(10)では「赤松」や「雪」が、あたかも「松/木」や「白いもの」という上位カテゴリーの典型的なインスタンスではないかのように捉えられているのであるが、それは概念化者の状態によるものであることに注意が必要である。すなわち、ある捉え方の提示は、対象の提示であるとともに概念化者自身のあり方を示すものでもある。これらの場合には、「赤松を発見したことを隠したい」、「眼前の光景をぼんやりと眺めている」などの概念化者自身のあり方を示しているのである⁴。このことはまた、(3)・(4)にも当てはまる。たとえば、(4)の「生命体」を「生物」で置き換えると、真理条件的には等価であり、どちらも「人間」の上位カテゴリーであるにも関わらず、奇妙な響きを帯びるのではないだろうか。上位カテゴリーを介する提示は、単なる言い換え以上の意味をもつのである。

以上の議論から、カテゴリー名を個体に適用する提喩は、ある対象が、対象それ自身の性質や概念化者の状態によって、そのカテゴリーの典型例と異なると判断されたために、より上位のカテゴリーを介して提示される表現だと考えられる⁵。

3. 個体の名前をカテゴリー名にする提喩

本節では、種で類を表す提喩の内、個体の名前をカテゴリー名にするものを扱う。(11)・(12)はともに、「フセイン」について「ヒトラー」の一種であると述べている。その際、話し手は「ヒトラー」に慣習的に結びついた「個体としてのヒトラー」という捉え方(意味₁)を介して、ヒトラーを代表とした「独裁的な政治家」という捉え方(意味₂)を伝達している。

- (11) Hussein is a Hitler. (山泉 2005: 281)
(12) フセインはヒトラーだ。

尼ヶ崎(1990: 62)は「あいつはドン・キホーテだ」という発話を例に挙げ、次のように述べている。「A氏の「らしさ」を理想的に体現しているのがドン・キホーテであると告げられて、私たちは、A氏がいかなる人物かを抽象的な概念の束によってではなく、具体的なドン・キホーテという人物によって理解するのである。[中略]「あいつはドン・キホーテだ」とは、A氏をドン・キホーテの芋づるに結び付けて新たなカテゴリーを形成してみせることである。A氏はこのカテゴリー(ドン・キホーテ・のよ

⁴ 物語における(本発表での「捉え方」に相当する)「相貌」のあり方については、野矢(2019: 第6章)に詳しい。

⁵ このタイプの提喩は、いわゆる「自己比喩」と捉え方の一部を共有している。自己比喩である(a)では「猫」が弾性的に振る舞っている(典型的な猫と非典型的な猫の間で概念の調整が行われている)が、(b)ではその弾性を表面化させずに、指示対象が猫の典型例でないことを、上位カテゴリーを用いて提示することで示している。

(a) ネズミを取らない猫は猫ではない。

(b) [猫として概念化できるがネズミを取らない対象を指して]あの動物は役に立たない。

うなもの)のメンバーであり、ドン・キホーテはプロトタイプである。したがって「ドン・キホーテ」はこのカテゴリーの代表詞となる。つまり典型事例を指す固有名詞であると同時に、そのメンバーの誰にも転用できるラベルである」⁶。

このことは(13)が「アミン」に「ヒトラー(を代表とする独裁的な政治家)類」であるという属性を帰す文として自然であるのに対し、(14)が不自然であることから確かめられる。私(たち)の百科事典的知識においては、「ヒトラー」のほうが「アミン」よりも独裁的な政治家としてより典型的であるため、あえて「アミン」を代表として取り上げ、そのカテゴリーに「ヒトラー」を位置づけたとしても、「ヒトラー」に関する理解はほとんど深まらないであろう。つまりここでは「アミン」という捉え方(意味₁)を介して「独裁的な政治家」という捉え方(意味₂)を伝達する動機がないのである。

(13) アミンはヒトラーだ。

(14) ?ヒトラーはアミンだ。

4. 下位カテゴリーで上位カテゴリーを表す提喩 (cf. 山泉 2006)

本節では、種で類を表す提喩の内、下位カテゴリーで上位カテゴリーを表すものを扱う。(15)では、「パン」が(パンを含む)上位カテゴリーの代表例になっている。文字通り「パン」を意味しているのではない場合に(16)のように返答するのが的はずれであることから、(16)が「パン」という捉え方(意味₁)を介して「衣食住」や「物理的充足」などの捉え方(意味₂)を伝達していることが分かる。

(15) 人はパンのみによって生きるにあらず。

(16) #いや、そもそも私は、パンは嫌いなんです。

このタイプの提喩も、前節で扱った個体の名前をカテゴリー名にする提喩と同じく、尼ヶ崎(1990)の分析が当てはまる。「パン」は「衣食住」や「物理的充足」の代表例として適切であるために、「パン」(意味₁)をプロトタイプとしたカテゴリー(意味₂)を表すことができるのである。(17)の「シャツ」や「家」は、「パン」と同じく「衣食住」や「物理的充足」において重要な位置を占めると考えられるが、この場合には、「衣食住」や「物理的充足」を表すという解釈はきわめて困難であろう。「パン」は(ある文化では)主食であり、それがなければ生きていくことができないという百科事典的知識があるために代表例としての資格を持つのである。

(17) [衣食住や物理的充足だけでは生きていけないということを意図して] #人はシャツ / 家のみによって生きるにあらず。

山泉(2017)は、「種によるシネクドキは、「筆箱」「花見」のような定着したもの(の一部)や、世界に新しい基本レベルと思われるカテゴリーを作った製品名(例:「ウォークマン」)の例がよく挙げられるものの、メタファーのように新規な例を自由に作ることが難しい。」(山泉 2017: 58)と述べた上で、

⁶ 代表詞とは「元来あるグループの一メンバーを指す言葉でありながら、同じグループ内の全メンバーに転用されるような言葉」(尼ヶ崎 1990: 36)のことである。

(18) に基づいた表現だと考えられる (19) を挙げ、“church” がその上位カテゴリーではなく、spiritual needs を満たすもの表していると考えられることから、(18) についても「種によるシネクドキと呼ぶべきプロセス、つまり、種が類全体をいきなり表すことが本当に作用しているのか疑わしい」(山泉 2017: 59) と指摘している。

(18) Man shall not live by bread alone. (山泉 2017: 59)

(19) Would the Church take care of our material needs as it takes care of our spiritual needs? Man shall not live by church alone, but by every other thing! (山泉 2017: 59)

しかし、(20)・(21) のように、何らかの例示であることが明らかな場合には新規の表現を作ることができる⁷。この場合では、「猫」という捉え方 (意味₁) を介して「人以外の動物」という (意味₂) が、「英語」という捉え方 (意味₁) を介して「(語学の) 勉強」という捉え方 (意味₂) が伝達されていると考えられる。(17) について確認したように、意味₁ が意味₂ の代表例であるからこそ、意味₁ によって意味₂ を示すことが可能なのである。(19) も同様に “church” をプロトタイプとした臨時的カテゴリーを表していると言えるだろう。

(20) A: [人付き合いが苦手な猫とばかり遊んでいる人に] 猫とばかり遊んでいちや駄目だよ。

B: #最近は犬とも遊んでいるよ。

(21) A: [英語の勉強に熱中していて生活が不安定な人に] 英語ばかり勉強していちや駄目だよ。

B: #最近はドイツ語も勉強しています。

5. 上位カテゴリーで下位カテゴリーを表す提喩とされているもの

本節では、上位カテゴリーで下位カテゴリーを表す提喩とされているタイプの表現を分析する。山泉 (2005) の分析を本発表の枠組みで言い換えると、(22) では、「ギター」という捉え方 (意味₁) を介して「エレキギター」という捉え方 (意味₂) が伝達されていることになる。しかし、この例はあや性を伴わない通常表現のように見える。すなわち意味₁ と意味₂ のずれが存在しないように思われるのである。

(22) ギター (→エレキギター) やっている人なら一度はこのエフェクターを使ったことがある
と思われます。 (山泉 2005: 280f.)

このタイプの表現は一般に総称文として分析されてきたものと深い関わりを持つ。Leslie (2007) によると、総称文ではシステム 1 による認知が働いている。システム 1 とは、素早く、自動的で、労力のかからない低次の認知システムであり、統計的情報を考慮しないものである (cf. Kahneman 2002)。(23) では「ライオン」という捉え方 (意味₁) を介して「(健康な) オスライオン」という捉え方 (意味₂) を伝達しているわけではなく、(24) では「蚊」という捉え方 (意味₁) を介して「西ナイル熱ウイルスを保有する蚊」という捉え方 (意味₂) を伝達しているわけではないだろう。(22) も同様にシステム 1 による認知を反映したものであると考えられる。つまり、(1) の①を満たさないために (少なくとも本発

⁷ これは、個体の名前をカテゴリー名にする提喩においても同様である。

表の規定では) 提喩ではないのである⁸。

- (23) ライオンにはたてがみがある。
- (24) 蚊は西ナイル熱ウイルスを媒介する。

このタイプの表現は提喩とは言い難いとはいえ、上位カテゴリーと下位カテゴリーの関係を利用したものであることは確かである。個体の名前をカテゴリー名にする提喩および下位カテゴリーで上位カテゴリーを表す提喩では、あるカテゴリーの代表例(意味₁)を手がかりとした、上位カテゴリー(意味₂)の伝達が行われていた。たとえば、(15)では典型例「パン」を代表例として、「パン」を含む臨時的なタクソノミーが形成されている。その際には、「パン」の性質がカテゴリー全体にいわば浸透している。言い換えれば、カテゴリーの一例が、そのカテゴリー全体の捉え方を決定しているのである。(22)にも同様の分析が可能だろう。「エレキギター」はもともと「ギター」の一種であるために新たなタクソノミーの形成は行われないが、目立った個体である「エレキギター」の属性がカテゴリー全体に浸透し、その捉え方を決定しているのである。

6. おわりに

最後に、これまで分析してきた提喩を提喩能力の観点から整理したい。カテゴリー名を個体に適用する提喩では、あるカテゴリーにおいて非典型的なインスタンスであっても、より上位のカテゴリーには問題なく収まる(ことが多い)という知識が提喩能力として働いている。

Langacker (2016) は *cat* を例としてカテゴリー形成の手続きを説明している。私(たち)は具体的な猫と出会う経験を基盤として、複数の猫やタイプとしての猫という捉え方を獲得する。猫カテゴリーは、猫の代表例から始まるのである。個体の名前をカテゴリー名にする提喩・下位カテゴリーで上位カテゴリーを表す提喩では、コミュニケーションにおいてカテゴリーを形成する提喩能力が働いている。

参考文献

- 尼ヶ崎彬 (1990)『ことばと身体』勁草書房。/佐藤信夫 (1978)『レトリック感覚』講談社。/田中太一 (2018)「「同じ事物」と「ありのままの現実」」『東京大学言語学論集』40: 239-249。/野矢茂樹 (2016)『心という難問 空間・身体・意味』講談社。/野矢茂樹 (2019)『そっとページをめくる——読むことと考えること』岩波書店。/森雄一 (1998)「提喩についての一考察」『明海日本語』4: 49-57。/森雄一 (2001a)「能力としての比喩、彩としての比喩」『成蹊国文』34: 90-100。/森雄一 (2001b)「提喩および「全体—部分」「部分—全体」の換喩における非対称性について」『日本認知言語学会論文集』1: 12-22。/山泉実 (2005)「シネクドキの認知意味論へ向けて—一類によるシネクドキ再考」山梨正明ほか(編)『認知言語学論考 No.4』ひつじ書房。/山泉実 (2006)「ドメインの統一による種で類全体を表す表現の分析」『日本認知言語学会論文集』6: 288-298。/山泉実 (2017)「意味拡張における説明概念としてのシネクドキの役割とメタファーとの関係」『日本語・日本文化研究』27: 50-66。/Kahneman, D. (2002) Maps of bounded rationality: A perspective on intuitive judgment and choice. *Nobel prize lecture*, 8, 351-401。/Langacker, Ronald W. (2016) Baseline and elaboration. *Cognitive Linguistics* 27 (3): 405-439。/Leslie, S. J. (2007) Generics and the structure of the mind. *Philosophical Perspectives* 21: 375-403.

⁸ 話し手と聞き手がエレキギターを話題にしていると了解しあっている場合であれば、「ギター」で直接に「エレキギター」を意味することも可能だろう。この場合も(1)の①を満たさないために提喩とは言えない。